



「尚友に倣い、漂流ごみを片付けよう」

全日本船舶職員協会

理事 小木曾順務（鳥羽商船 44E）

明治維新のリーダーに大きな影響を与えた儒学者の佐藤一斎（昌平坂学問所儒官）は恵那市岩村町が故郷であり、私と同郷である。

そこは日本三大山城と国選定重要伝統的建造物群保存地区で清閑な地として休日には多くの都会人が心をいやしに訪れている。

戦後 70 年日本は物質的に豊かにはなった。しかし、政界や財界でも不祥事が多発、今こそ精神的な豊かさが求められる時代と言えよう。

1468 年本願寺中興の祖である蓮如上人が三河（愛知県）に本宗寺を建立、1603 年徳川幕府で松平家乗が岩村城主（恵那市）に、松平乗佑が西尾城主（西尾市）に、以来明治維新まで西尾藩と岩村藩は大給松平が世襲するが、この岩村町を上流とする矢作川を抱える土壌豊かな三河の地に浄土信仰が根付き土徳となって生きている。それが一斎にも継承され、また一方、工業立県愛知の基礎となりトヨタ自動車を生み国の財政をも支えている。

このように一斎は江戸後期の教育者として幕末の志士たちの生き方に多大な影響を与えた。

一斎が導いた人脈の概要と今我々に求められる課題を以下に纏める。

江戸末期「師恩有益」を説いた吉田松陰の師が佐久間象山（長野市）、司馬遼太郎の「峠」の題材となった河井継之助（長岡市）を「理財論」で育てたのが山田方谷（高梁市）、また長岡市生まれの海軍大将山本五十六が学んだ小林虎三郎の「米百俵」の逸話は有名である。その師が佐久間象山ですべて一斎に繋がっている。また江戸末期松平容保の命を受け会津から北見、京都、鹿児島までを行脚し晩年熊本五高に奉職した秋月悌次郎も昌平坂学問所卒である。一斎は学問所で四書五経を基に全国に 3,000 人と伝わる弟子たちを指導し、言志四録 1133 条を書き上げた。西郷隆盛もこの書から 101 ケ条を撰び、西郷南洲手抄言志録として人生の指針とした。また西南の役の折、日本で最後の斬首刑となった島義勇も一斎の薫陶を受けその教えを生かし原野の札幌を道都に変え北海道開拓の基礎を築いた。

私は 1966 年鳥羽商船に入学、船員を志したが、1977 年一転し陶磁器業界に飛び込んだ。1987 年アルミナ（ Al_2O_3 ）を 30%含む強化磁器食器が

学校給食向けに誕生、縁あって販売に携わり 1995 年全国行脚を開始、2005 年言志四録を携え秋田県行脚の折高校生（菩薩 5 人衆）との会話の中から Al_2O_3 の大切さ（売りっぱなしにしないで!!）を悟り義利両全で破損食器の全国回収を決断、ここが人生のターニングポイントとなり 2007 年ものづくり日本大賞を受賞、2013 年国の方針である広域認定（228 号）を取得した。

この 40 年に及ぶ活学で、全国各地に土徳と語られる道心（良心）が存在し一斎の教えがこの平成の世にまで繋がっている事を体感した。

この体験から海国日本に今求められるのは漂着ごみを資源に転換する道づくり、所謂尚友に倣い異業種連携で漂着ごみによるリサイクルの輪を協会が創り上げることである。

船主協会は、地球環境保全のために海運業は何をすべきか、安全で効率的な輸送のために関連分野も含めたインフラ整備は如何にあるべきかなど、日本の海運業を常に大きな視点から捉え、活動している。

折も折、日本財団笹川陽平会長が 7 月 3 日の産経新聞正論欄で 50 万トンの漂流ごみの改善に向け海洋環境の再構築の必要性を語られ、また今春弓削商船高専が海岸の漂着ごみを島の宝にしたいと廃プラスチックをガス化する実証プロジェクトを立ち上げた。

正しく海に生きようとする男たちの、言志後録 24 条「真の功名は道德即ち是なり」の実践である。この弓削商船高専のプロジェクトを単に学校教育だけに留めるだけではなく協会が国と連携し海洋改善に寄与する循環型社会の教育事業に仕上げるのである。

今、私も協会に参加しているが、平成 27, 28 年国庫補助事業で廃 PET ボトルから PET 食器を創った。PET ボトルが食器に成る時代である。漂流ごみを片付けるために燃料化を話題に固形燃料を使用する地元中部電力(株)、識者や自治体などをお訪ねしリサイクルの輪が構成できるか、この可能性を調査し必要性を再確認した。

事業推進にはまず協会会員各位の賛同を得、固形燃料化に向けては協会が、電力会社と港湾関係者を集め国と協議ができるまでのスキームを作ることである。

この課題について皆さんの声をお寄せ下さい。